

詠む広場

毎日歌壇

鶴ヶ島市 青木 律子
病む妻と箸を置きたり遠花火
東大阪市 志賀 克毅
送り火に後姿の消えてゆく
福岡市 手島喜美江
雷鳴の只中に聴く地震速報
磐田市 大石 志づ
定命と言われうなずく生身魂
岩手 佐々木松男
朝顔や甘えたがりの方が兄
岡山市 岩橋のり輔
直方市 岩野 伸子
風入れの被爆者名簿父の名も
東京 徳原 伸吉
胸の内までは分らず法師蟬
鈴鹿市 岩口 巳年
屋根へ放る乳歯ひとつぶ原爆忌
川越市 益子さとし
色褪すにまかせて風の百日紅
周南市 九内 千沙
水打ちて黙禱の朝迎へけり
東京 山口 治子
甲府市 奥野 節子
馴れどまたつながらし蟻の道
札幌市 村上 紀夫
沢水に暮らす三軒秋旱
柏市 室崎 育美
学校に残る土俵や竹の春
富士宮市 矢野 悦子
午下り翳も漆黒黒揚羽
東京 松 あき子
青鳥のなかの脱毛サロンかな
秋田市 吉行 直人

俳句の鼓動

が多かった。△文脈はいつまであるか
の闇 永井八郎△秋桜ありて明るき雨
後と死後 高橋優作△俳句の震へ夜明
けの加速する 田口美優△明るくて苦
しくて檸檬となりぬ 東海林あや△優
秀句の半数近くが「明」の句だった。
皆さんは高校生の「明」の句を読まれ
てどう感じただろうか。明るい句がある
一方、未来への不安の句もあった。高校
生にとって、日本や世界の未来は明るい
ものになっているだろうか。悩ましいと
ころだ。一つだけ断言できることがある。
これだけの俳句が詠める高校生がいる。
だから、俳句の未来は明るい。
(ほしの・たかし「俳人」)

米川千嘉子 選

明日から乳児へ昇格新生児泣けば涙が出るよ
うになった
村上市 杉江 正子
△評▽生後28日未満が新生児。1歳未満が
乳児。情報と事実だけでまとめながら、新
しい生命への喜びが確かにあふれる。

加藤 治郎 選

指で行くA地点からB地点入院三日目きょう
はネパール
△評▽スマホの地図だろうか。空想の旅だ
が計画的である。入院に現実感がある。ネ
パールに青空が思われ心が解放される。

水原 紫苑 選

臘すきてほとんど埃めいた月 わかってく
れる気がしてました
横濱市 街川 二級
△評▽ほこりのような月は何をわかってく
れるのだろう。輝きたいのか。捨てられた
のか。

伊藤 一彦 選

新聞の一面に見る「平」の文字 一本足で踏
ん張って立つ
宮崎 門田 藍子
△評▽きっと平和の「平」の字だろう。い
ま世界の平和が危ういことを表現した下の
句が卓抜だ。10代の作者のシャープな作
遣されし父の十年日記には抜け落ちており吾
との諷刺

△評▽潮が引いてもまた満ちて来る海。喪
失を知らない海に悲しみを打ち明ける。
爆心地に溢れる水と人の波ペットボトルは金
二百円
西海市 まえだいっき
ほめること知らざるままに逝きにけり母とい
う字は積み木の硬さ
仙台市 石川 初子
ライフプラン通りに行かぬと嘆いたがプランを
変えてまた四股を踏む
横浜市 友常 甘酢
「大丈夫ですか」とLINEも送れない先輩
未満の先輩のまま
四日市市 早川 和博
スカイツリー真下の業平尋常小登校の父の
馴染みし浅草
武蔵野市 三井 一夫
磐梯の麓にひろがる田を見れば風に波立つ
われの海なり
会津若松市 ともりゆめ
羽もなく鱗もなくただたよりなく星図と海図
のあいだに眠る
東京 石川 真琴
物言いは野球にもあるが野球には協議で決め
る同体がない
静岡市 柴田 和彦

君のいる街にも雨が降ることを天気予報でた
しかめて寝る
名古屋 森本 有
△評▽明日の雨を君と共有できることがう
れしい。下句に一途な思いが表れている。
真夜中のカフェで詩集を読んでいるきみの足
元の影が走り出す
藤沢市 りつとうゆき
宮崎で過ごした夏を思い出す
君は心のプー
ゲンピリア
岐阜市 山上 秋恵
地下都市のみずうみに建てられているマンモ
ス色の仏教タワー
雲南市 熱田 俊月
フラダンスみたい生きてゆくこともできると
思うミロのヴィーナス
津市 川原田明子
岬から見れば小さなふるさとで愛犬にだけ打
ち明けた夢
鳥取市 中之島 潤
夕なぎにふたり途方にふれてた
ストリート
ビュウの写真みたいに
大野城市 野分 のわ
吾子握る葡萄パンから零れ落つ言葉の先の生
の発芽よ
川崎市 新井 将
桃パフェの傾斜と同じ方向に顔をそろえてお
いしかったね
名古屋 外山 雪

自動ドア開閉するたび入ってくる風にも愛さ
れてないアネモネ
安城市 唐澤 うに
△評▽風のリアルな実在感に、アネモネの
孤独が深まる。
花びらの薄き手相にひとすじの感情線を見つ
けてしまふ
国立市 蔵 井
月光が祖父の海馬を満たすまであらゆる可能
性を話した
東京 境 千尋
吐息を洗ふ
東京 吉岡 耕大
吐息を洗ふ
東京 吉岡 耕大
吐息を洗ふ
東京 吉岡 耕大

「小林さん」と娘の姓で呼ばれをりアレイル
ームに病児と遊ばば
豊中市 赤木 菜花
古民家の廊下歩けばむりむりと心割られる音
が聞こえる
古賀市 砂山ふらり
戦争を語らず逝きし祖父はただ終戦の日を敗
戦日と言えり
神戸市 浅田 拓史
冷めてゆくやかの麦茶
今ならば母を許せ
るような気がする
三条市 甘 辛
まとめよと何度言っても老い母は5匹のネコ
に10皿のエサ
春日部市 宮代 康志
数多なることばあれども子育てのことばは足
りずAIに聞く
伊丹市 岡本 信子
夕立のあがりてもなほ遠雷のこる林のひぐ
らしの声
東京 浅倉 修
目が覚めてまだ生きていることを知り生駒の
山にあいさつをする
生駒市 宮田 修

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます

次回15日に掲載します。